

# 英語物語文を用いたプレゼンテーション教育の実践

村木 恭子 松岡 佐和美

## Presentation Practice

—Using English Narrative Stories—

Kyoko MURAKI and Sawami MATSUOKA

English learners desire to cultivate communication skills. However, foreign language education not only at junior and senior high schools, but also at universities, has not been focused on cultivating communication skills. The cause is class size problems, differences in proficiency levels, differences in motivation, etc. Therefore, as a novel attempt to cultivate communication skills, we created presentation activities using English narrative stories for each of two proficiency level classes. We divided the students into small groups and, after two weeks, had the students give a theatrical English-language story presentation. Furthermore, a questionnaire by self-evaluation by group was implemented. The results revealed the students gave high evaluations for visual effects and corporation. However, the evaluation of students was low for pronunciation, fluency and presentation. Moreover, variance regarding quality of the responses to the questionnaire and the preparation time was noted between the groups. Therefore, by improving methods such as increasing future opportunities for students to give presentations in English, reviewing questionnaire acquisition methods, and enriching reflection after presentations, it may be possible to further promote communication skill cultivation.

## 1. はじめに

英語学習者にとって、「話すこと」(コミュニケーション能力)に対するモチベーションは、外国を旅行してみたい、留学してみたい、友達を作りたい等の憧れからかとても高いものの、中々上達する方法を見つけることが困難である。中学校・高等学校の外国語教育においても、文部科学省の提言にもあるように、英語の四技能を活用して実際のコミュニケーションを行う言語活動を一層重視していくための様々な工夫や努力が成されているが、定期試験や入学試験を意識した授業運営や、クラスサイズの問題などからなかなか簡単には進まない現状である。

大学の授業においても、クラスサイズの問題や、学力差の問題、また基礎学力向上を重視した授業展開をする必要があるという状況から、常にコミュニケーション能力に重点を置いた授業展開を行うことは容易ではない。また、習熟度別のクラスであったとしても、コミュニケーション能力を重視とした習熟度ではないこと、また学習者のモチベーションの違い等から困難が予想される。

千菊ら（2016）では、高等学校1年生を対象として、物語文の紹介を目的としてプレゼンテーション形式で口頭発表させる活動を一定期間行い、事前事後テストとしてスピーキングテストを課すことで、発話の流暢さを調査した。その結果、発話量が有意に増え、流暢さも向上した。

松井・田室（2017）では、多文化共生プロジェクトとして、ドキュメンタリー演劇の実践について紹介している。その中で、共通の言葉を持たない参加者同士が1つの演劇を作り上げ演じていく、その過程には身体や五感を要し、対話を重ねることで参加者間に強い信頼と団結が生まれると指摘している。

本研究では、コミュニケーション能力育成を目的とした授業展開の試みの1つとして、2つの習熟度クラス（中上級・中級）において、少人数のグループに分かれて、英語で書かれた物語文を用いてプレゼンテーション活動に取り組み、その効果及び参加者の意識について考察した。

## 2. 教材研究

今回の実践では、導入としてアレン（2005）の“*One windy day*（ある風の日に）”の歌の紹介を行った。これは、“*The bear*（森のくまさん）”のメロディーに「3匹の子ぶた」の物語を乗せた替え歌である。物語を単調に読むのではなく、抑揚やリズムを意識したり、ジェスチャーを交えて体を使って表現することの練習として用いた。まずは、1番から3番までをクラス全体で練習したのちに、グループ毎に好きな歌を選択させ、練習時間を与えた後にクラスで発表をしてもらった。

次に、ソーレス・久野（2003）より以下の3つの物語をクラスで発表課題として紹介した。

- ・ *The north wind and the sun*（北風と太陽）
- ・ *The lion and the mouse*（ライオンとねずみ）
- ・ *The golden ax and the silver ax*（金のおのと銀のおの）

選択理由としては、それぞれ有名な物語であることから、将来保育現場で使用でき、また幼少の頃に触れたことのあるであろうなじみのある題材を使うことで、発表に対する恐怖心を少しでも和らぐことを期待した。ただし、今回使用した教材は原著ではなく、読みやすい長さにされたものであり、活動として重くならない程度であること、また付属の音声教材には音響効果が含まれている点から雰囲気を紹介できる点があげられる。

## 3. 方法

まず、3つの物語について、授業内で紹介をし、音声教材も用いることで雰囲気をつかむ事を重視しながら、全体での音読練習を行った。全ての教材紹介が終了した後、2-4名のグルー

ブに分かれ、それぞれのグループで取り組む物語を決め、役割分担の相談を授業内で行った。小道具に関しては、発表に必要な物をグループ内で相談し、手分けして準備するように指示した。グループに分かれての作業及び練習は授業外で行うこととして、2週間の準備期間を設けた。発表後には、グループ毎に評価のアンケートを行う旨を全員に伝えた。アンケート内容は、以下の通りである。

- a. visual effects, correctness, fluency, performance, corporation に対する 5 段階評価
- b. 準備時間
- c. 良くできた点
- d. 今後の改善点

尚、a の発表に対する 5 段階評価については、以下のように評価基準を説明した。

- ・ visual effects：聞き手が視覚的にもお話の世界に引き込まれるようなものを作成できたか。
- ・ correctness：英文を正しく読めたか。
- ・ fluency：話しぶりがなめらかでよどみなく聞きやすいものであったか。
- ・ performance：恥ずかしがらずにそれぞれの役になりきって演じることができたか。
- ・ corporation：グループ内でうまく役割分担をし、協力しあって準備をし、発表に臨めたか。

## 4. 結果

### 4.1 発表に対する 5 段階評価

発表に対する 5 段階評価について、平均値を表 1、表 2 で示す。中級クラスは、7 グループずつで構成されていた。

表 1 中級クラス グループ評価 (単位: 点)

	A クラス	B クラス
visual effects	4.0	5.0
correctness	3.9	4.1
fluency	2.9	3.8
performance	3.3	3.9
corporation	4.9	5.0

\*平均点は、小数点第二位を四捨五入。

表 1 から A、B どちらのクラスでも fluency に対する評価が、他の項目と比較して低いことが特徴的であり、A クラスでは平均以下という厳しい評価であった。逆に、visual effects, corporation に対しては満点に近く、満足している様子がうかがえる。

表2 中上級クラス グループ評価 (単位:点)

	Aクラス	Bクラス
visual effects	3.9	4.3
correctness	3.6	3.5
fluency	3.2	3.3
performance	3.9	4.5
corporation	4.5	4.9

\*平均点は、小数点第二位を四捨五入。

中上級クラスは、Aクラスが10グループ、Bクラスが8グループで構成されていた。表2より、中級クラスと同様に、両クラス共に fluency に対する評価が他の項目と比較して低く、また correctness に対する評価も低いことが分かった。corporation については、中級クラス同様に高い評価であった。

#### 4.2 準備時間

準備時間について、各クラスの平均値を表3で示す。

表3 準備時間の平均 (単位:分)

	Aクラス	Bクラス
中級	188.6	168.6
中上級	140.5	245.0

\*平均点は、小数点第二位を四捨五入。

準備時間については、グループ間で大きな差が見られ、最短で60分、最長で480分という結果であった。今回の回答では、「原則全員で取り組んだ時間」を記述してもらったが、詳細は定かではない。受講生が各自で小道具等の準備に取り組んだ時間、練習に取り組んだ時間、グループ全員で集まって練習した時間のように細かく問う形式であった方が、より詳細な回答が得られた可能性がある。

#### 4.3 良くできた点

自由記述のアンケートについては、習熟度別にまず全ての記述を拾い出し、分類分けを行った。表4で中級クラス、表5で中上級クラスの結果を示す。

表4 中級クラス 良くできた点

項目	件数
役になりきれた	7
ジェスチャーなど全身を使って表現できた	5
大きな声でできた	2
発音、声の出し方に気をつけた	4
台詞の配分に気をつけた	3
スムーズに発表できるように工夫した	3
音響効果を工夫した	11
小道具を工夫できた	15
協力して分担できた	6
楽しくできた、全力でできた	2

小道具や、音響効果等の準備の工夫に対する評価が多く、また協力できたと評価するグループが多く見られた。一方で、声の大きさや発音に関すること、ジェスチャーなど全身を使った表現に対する評価は少ないことが分かった。

表5 中上級クラス 良くできた点

項目	件数
役になりきれた	4
ジェスチャーなど全身を使って表現できた	5
言葉の抑揚、イントネーションに気をつけてできた	4
大きな声でできた	8
スラスラとできた、暗唱できた	5
表情に気をつけてできた、笑顔でできた	5
アドリブや、相手のフォローをできた	7
小道具、効果音を工夫できた	15
協力して分担できた	6
楽しくできた	2
練習がしっかりできた	3

中級クラスの結果と同様に、中上級クラスでも小道具や、効果音等の準備の工夫に対する評価が多く、また協力できたと評価するグループが多く見られた。中上級クラスでは、アドリブやグループのパートナーが間違えてしまった際のフォローをできた、練習をしっかりとできたというグループも見られた点が特徴的である。さらに、声に対する評価については、大きな声で発表できたとするグループや、言葉の抑揚、イントネーション、また暗唱できたというグループも複数見られた。

#### 4.4 今後の改善点

今後の改善点についても、良くできた点同様に習熟度別にまず全ての記述を拾い出し、分類分けを行った。表6で中級クラス、表7で中上級クラスの結果を示す。

表6 中級クラス 今後の改善点

項目	件数
発音、流暢さに気をつける	7
声の大きさ、声色、速度に気をつける	6
恥ずかしさを持たない、笑わない、発表に対する意識を高める	5
小道具を工夫する	5
台詞を覚える	6
練習（リハーサル）をする	4
準備を余裕を持って行う	2

発音に関する事、声の大きさや声色、話す速度に関するコメントが多く見られた。また、発表に対して恥ずかしさを持っていたため、改善したいという意思を持っているグループも複数見られた。特徴的なコメントとして、「園児の前ということをもっと意識する。」というコメントをしたグループも1つ見られた。今回は観客が大学生であったものの、保育者を目指し、保育に密接に関係した内容を扱う上で、参加者の発表意識や意欲を高める為には、園児の前で発表をするということを意識させるよう工夫がさらに必要になると考える。

表7 中上級クラス 今後の改善点

項目	件数
発音、流暢さ、速度に気をつける	11
聞き手を見ながら発表する	4
恥ずかしさを持たない、笑わない	2
小道具を工夫する	14
台詞を覚える	5
練習（リハーサル）をする	6
準備を余裕を持って行う	2
身振り手振りをつける、感情を込める	7
緊張しないよう場慣れ、メンタルを強くする	3

中上級クラスでは、大きな声で発表できたという評価が多かった為、声の大きさに対する改善のコメントは見られなかったが、発音や流暢さ、速度に対する改善の意識は高いことが分かった。また、聞き手を見ながら発表する、緊張しないように場慣れが必要など、発表することに対する苦手意識があり克服する必要があると感じている様子が垣間見られる。特徴的なコメントとしては、「もう少し他のパートのところも覚えて、手助けできるようにしたい。」というコ

メントが挙げられる。中上級クラスでは、良くできた点で「相手のフォローができた」とコメントするグループも複数あり、今回のコメントも合わせて、1人で課題をこなすのではなく、グループ活動に対する意識が高い様子がうかがえる。

## 5. まとめ

本研究では、2つの習熟度クラスにおいて、英語で書かれた物語文を用いてプレゼンテーション活動に取り組み、その効果について考察した。

5段階評価では、両習熟度共に、**fluency** に対する評価が低く、中上級クラスについては **correctness** に対する評価も低いことが分かった。自由記述コメントから、これらの点について発音や声の大きさに気をつけて発表できたと評価するグループや、発音や流暢さをさらに改善する必要があるとするグループも複数見られ、声に関する苦手意識及び改善の意識がそれぞれ高いことが分かった。さらに、「聞き手を見て話す、恥ずかしさを持たない、笑わない」等の発表に対する苦手意識を多少なり持っていることが分かった。このことから、日々の活動の中で声を出して発表をする力をつけていくことのできるような課題を積極的に取り込んでいくことが必要であると感じた。

今回の発表では、発表に必要な小道具を無理の無い範囲で準備するよう指示したが、**visual effects** の5段階評価も約4点と高く、また小道具について工夫できたとコメントをするグループも複数見られた。一方で、他のグループの発表を受けて、小道具をもっと大きくした方が良かった等の改善を意識するグループも複数見られた。発表の小道具であって、小道具の作成が主活動ではない為、バランスが難しいが発表に対する意識を高める為には、無くては成らない準備であると感じる。また、練習時間についても、リハーサルや各自の練習をもっとしておけば良かったというコメントも複数みられた。通常、1単位授業に対する授業外の予復習時間は、週1時間程度とされているため、発表の準備・練習のみを予復習時間として当てることは好ましい状況ではない。リハーサルの時間を授業内でもうけるなどの工夫が今後必要になってくると考えられる。

今回の発表では、グループに1つのアンケートを行い分析した。グループで1つということで、意見を出し合うという一種のグループ活動を行うことができる一方で、個別の意見が出しにくいというデメリットも見られる。また、自由記述としたことで、意見がたくさん出るグループとそうではないグループが見られた。その為、今回の結果からアンケート項目を精査し、**yes/no** で答えられるような形式にすること、さらに準備時間についても、できるだけ細かく記録する等明確な指示が必要である。さらに、発表活動をビデオ録画し、振り返りを各自で行う環境があると尚一層活動の幅が広がるのではないかと考える。

## 参考文献

- (1) アレン玉井光江 (2005) 「18 自然・天気 One windy day ある風の日に」アルクキッズ英語編集部編『英語の歌&アクティティ集』アルク, 50-52.
- (2) 千菊基司 他 (2016) 「プレゼンテーション能力育成を目指した指導が高校生の英語力に与える影響」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第44号, 269-275.
- (3) ジェリー・ソーレス, 久野レイ (2003) 『英語で読み聞かせ せかいのおはなし1』三省堂, 22-27, 52-55.
- (4) ジェリー・ソーレス, 久野レイ (2003) 『英語で読み聞かせ せかいのおはなし2』三省堂, 22-27.
- (5) 松井かおり, 田室寿見子 (2017) 『「ドキュメンタリー演劇」の挑戦—多文化・多言語社会を生きる人たちのライフストーリー—』成文堂

(受理日 2018年1月9日)